

馬琴と大坂

『月水奇縁』成立に関する一考察――

はじめに

文化二年（一八〇五）、大坂の出版書肆河内屋太助から刊行された『月水奇縁』は、曲亭馬琴が手がけた最初の半紙本読本である。これは、馬琴自身の「大坂の書賣河内屋太助に前約あれは月水奇縁五巻を綴る。是曲亭か半紙形のよみ本を綴る初筆也」〔近世物之本江戸作者部類〕（以下『作者部類』）という記述からも明らかである。また、「この書大く時好に称ひて印行の年^{文化二年}大坂并に江戸にて千百部売れたりといふ」（同）とも述べ、本作の好評ぶりが窺える。馬琴は、『月水奇縁』を契機として半紙本読本の執筆を重ね、その経験が後年の大作『椿説弓張月』（文化四〇八年（一八〇七―一）刊）の刊行へと結びつく。

『月水奇縁』は、冤罪で殺された永原家の侍女漣漪の霊による

中尾和昇

災いに始まり、主人公熊谷倭文と女主人公玉琴が苦難の末、狐の報恩を受けて復讐を成し遂げるという物語で、これまでも多くの研究が備わっている。早くは、暉峻康隆氏が近松門左衛門の『津国女夫池』（享保六年（一七二二）初演）との関連を指摘し、続いて大高洋司氏が、淀屋辰五郎事件に取材した浮世草子『棠大門屋敷』（宝永二年（一七〇五）刊）と『風流曲三味線』（宝永三年（一七〇六）刊）を主要典拠と論証し、さらに『優曇華物語』（文化元年（一八〇四）刊）で山東京伝が新たに確立した読本の枠組みを用いつつ再構成したと主張する。一方徳田武氏は、伊藤蘭洲を介して『鳳凰池』から構成や趣向を取り入れたことを指摘し、中国白話小説からの影響を論じている。また、本作が『忠臣水滸伝』（前編寛政十一年（一七九九）、後編享和元年（一八〇一）刊）の修辭様式に追従しているとの野

口隆氏の指摘もある。

ところが、本作の成立に関しては、大高氏が東西書肆間の緊密な関係から、濱田啓介氏が馬琴と馬田昌調との関係からそれぞれ指摘しているものの、なぜ流光斎如圭が挿絵画家として、河内屋太助が版元として成立に携わったのかについては、依然として不明な点が多い。そこで本稿では、『羈旅漫録』を手がかりに、江戸・大坂における馬琴の人間関係を再検討し、『月氷奇縁』成立の背景を明らかにしたい。

一

『羈旅漫録』は、享和二年（一八〇二）五月九日に出版し、八月二十四日に再び江戸に戻ってくるまでの、約三ヶ月間にわたる旅の様子を記した紀行文で、同年の冬に執筆された（『作者部類』⁹）。『羈旅漫録』巻上「旅泊概略」によると、馬琴は七月二十四日に京を離れ、その日の夜に大坂に到着。翌月の六日に出版するので、大坂には約十日間滞在したことになる。わずかな期間ではあるが、後に「古人の伝記、墓誌、奇説等を筆記」した随筆『蓑笠雨談』（文化二年刊）全三巻のうち、第三巻には大坂の記事がまとまって記されており、この地に対する強い思いが窺

える。

さて、先ほど触れた「旅泊概略」には、「友人舟場まで送らる」という記述が見られる。これは、馬琴が大坂を離れる際に、友人たちが八軒家の舟乗場まで見送りに来てくれたことを意味する。ここでいう「友人」とは、『羈旅漫録』本文に、

八月五日七ツ時ころ大坂を出立。船にて伏見へ登る。今日浪花の友人盧橘、国瑞、薺坊、さ、山和尚、雨窓、蜀人、大野木等、送行の盃をかたむく。（巻下「伏見の夜泊」）

とあるように、傍線部の面々である。また、「送行の盃」という言葉が示すように、彼らとは親しい間柄だったことが想像される。例えば、八月三日には用意してもらった屋形船に乗って住吉を訪れ、伊丹屋という高級料亭で舌鼓を打ち（巻下「住吉」）、別の日には新町の遊廓で宴席に連なり、狂歌も嗜んだ（同「首信が伝」¹⁰）。このような関係にあった友人たちは、馬琴が日常手控えの住所録として用いていた『滝沢家訪問往来人名簿』（以下『往来人名簿』）によると、

- | | | |
|------------|---------------|-------|
| 一 讃岐屋町会所の裏 | 蔵持者
惣持ト号 | 田宮由藏殿 |
| 一 南本町五丁目 | 医師野文家
国瑞ト号 | 馬田昌調老 |
| 一 さぬき屋町 | 医家
さ山ト号 | 常元寺上人 |
| 一 天王寺西門前 | 医師
かふら坊ト号 | 佐伯重甫老 |

一 心齋橋安堂寺町

書林

秋田屋市兵衛殿

手代惣兵衛殿 大野木氏

一 南本町五丁目

雨窓卜号

河内屋五郎右衛門殿

子息五市殿

一 渡辺筋過書町北江入西側

燭人卜号

千草屋甚三郎殿

と記されている。これを一見するに、戯作者、医者、出版書肆など、その交際範囲は幅広い。なかでも盧橋(田宮仲宣)には、「この人予逗留中大に深切にもてなさる」(巻下「大坂市中の総評」とあるように、大いに世話になったようである。

では、なぜ生粋の江戸人である馬琴が、わずかな期間で大坂の人々と親しい関係をもつことができたのか。その疑問に答えるのが、左の書簡である。よく知られている資料だが、以下全文を掲げる。

常元寺様 拝読。

馬田昌調様 御教育之趣
怕奉承知候

佐伯重甫様 奉畏候。

大田直二郎

田宮由蔵様 前書同様の
御事二おはし候。

乍略義、以御連名申上候。弥御安泰被成御座、珍重奉存候。此度滝沢解上坂^{トクル}二付、一封申上候。滝沢生事ハ、小子年来存居候ものにて、彼和文を集メし『一もと草』の中二「草

市」「吹革祭」等之文を書候もの二而、和文ハよほど達者ニ書申候。年来戯作上木多く、一々ハ覚不申候。年々絵草紙著述いたし、馬琴作と有之。近來京伝二つぎての作者ニ御ざ候間、拙者御請ニ罷立、四君へむけ上申候。柿壺其外風雅之諸君、心齋橋辺之書肆等へ御引付奉頼上候。和文ハ何ニても御書せ御覧「可」被成候。即刻二筆を下して文をなし申候。尾州名古屋へも立より候由二付、其御地へハ此手紙之日付より遅ク相成可申候。至極面白キ人ニ御ざ候間、御蟲眞御評判之程奉希候。

米庵之会、爾今難忘奉存候。劉郎天台より帰候心様にて西望いたし候。勿々不乙 五月六日

「大田直二郎」とあるので、差出人は大田南畝(一七四九—一八二三)。そして、「拙者御請ニ罷立、四君へむけ上申候」とあるので、南畝が仲介役となつて馬琴を大坂の「四君」に紹介したことになる。その四君とは、冒頭に記されている四人を指し、先に掲げた『羈旅漫録』や『往来人名簿』の記述と合致する(以下、田宮仲宣ら四人を「四君」と略記する)。また、この四君に与えられた役目は、「心齋橋筋辺の書肆等へ御引付奉頼上候」とあるように、『往来人名簿』に「心齋橋安堂寺町」と記されている秋田屋市兵衛などを馬琴に紹介することである。つま

り、馬琴の大坂滞在においては、南畝が大きな後ろ盾となっていた。

周知のとおり、南畝は幕臣である。寛政六年（一七九四）の湯島聖堂の学問吟味に首席で及第。翌年には支配勘定に昇進し、馬琴の上方旅行のちょうど一年前には、銅座詰役人として一年間大坂に滞在していた。在坂中に記した『蘆の若葉』と題した日記あるいは書簡などには、大坂での様子が克明に記されており、四君との交流も窺える。そこで、以下南畝と四君の交流關係を、上記資料などをもとに確認していきたい。

まずは常元寺（生没年未詳）。彼は文字どおり浄土真宗常元寺の僧侶だが、一方で文人という側面もあつた。享和元年八月五日付の大田定吉宛書簡によると、「常元寺より四書制類聯と申新渡之唐本二帙寸珍本もらひ申候」とあり、中国渡来の書物に明るかつた。また、『蜀山余録』（享和元二年）に、

京都中立売にすめる、江並輔之丞隆連和歌、

紅のこぞめに咲る梅の花香をもてはやす人ぞすくなき
山城のよどのわたりのわたし守君をばひとりわたさず
もがな

右七月廿日夜、常元寺物語也。

とあるように、和歌にも造詣が深く、南畝も「阿波座堀なる常

元精舎にまかりて、歌よみなど」（『蘆の若葉』巻二、「六月十六日」条）に参加した。

続いて馬田昌調（生没年未詳）は、大坂米屋町に居を構える医者で、字は国瑞、号は柳浪・天洋など。南畝の役宅はその近くで、先に挙げた八月五日付の大田定吉宛書簡に、

此地（大坂―筆者注）馬田氏常元寺日々出会、親類同前に
心易く用事相達し調室に御座候。馬田氏妻もよき人物にて、
衣類等之事迄心附申候。

とあるように、家族同前の付き合いをしていた。南畝が「久留米樺島勇吉同門の医生馬田昌調と申候もの、関叔成をもよく存居候。和漢の学にて詩は至て好きにて、日々唱和慰客懷候。重て可懸御目候」（享和元年四月十九日付 山内尚助宛書簡）と評しているように、昌調は白話文学に通じており、詩を吟じ合うこともしばしばであつた。また、読本作者としても著名で、『月夜物語』（文化七年（一八一〇）刊）や『朝顔日記』（文化八年（一八一二）刊）などの著作がある。

三人目の佐伯重甫（？―一八二九）は、先に挙げた『往來人名簿』にもあるように、四天王寺の近くに住し、医を生業としていたが、それと同時に「青々園蕪坊」の名で狂歌も能くした（『狂歌道の葉』）。特に、江戸の狂歌師鹿都部真顔（一七五三―

一八二九）編の『住吉紀行』（文化八年（一八一）刊）に記されている、南畝との狂歌問答は著名である。南畝が彼の許を訪れた際には、「盃とりぐにくみかはしつ、けふ伴ひこし馬田氏と、もに立かへるを、佐伯氏は猶あかずして、遊行寺のあたりまで送り来れり」（『蘆の若葉』巻二、「七月七日」条）とあり、深い親交が窺える。

田宮仲宣は洒落本・随筆作者で、蘆橋庵・東臈子とうりゅうしとも号す。天明五年（一七八五）、大坂に住んで文筆を業とし、寛政初年に狂歌師蕪坊（佐伯重甫）の世話で、謡と手習いの指南や儒書国書の講釈をした。寛政末年頃、郡山を中心に大和の諸所を漂泊のち再び大坂に戻る。南畝は、彼に大坂を案内してもらった傍ら、近松門左衛門の碑文や鷹金文七の奉納絵馬など、大坂ゆかりの人物について教えを乞うこともあった。

以上から、南畝と四君との交流関係は、浅からぬものであることがわかった。それは、江戸での盛名もさることながら、銅座詰役人として長期間在坂することによって、和歌・狂歌・漢詩など、文芸面での交わりが頻繁になされたことが大きな要因だろう。その結果、先に挙げた『蘆の若葉』巻之二「七月七日」条、あるいは巻之三「九月三日」条の「帰路に佐伯氏にたちよれば、馬田天洋・蘆橋庵など来り、酒くみかはし居れり」とい

った気が置けない関係を持つことができたわけである。

では、馬琴と南畝の関係はどうであったか。享和三年（一八〇三）、五十五歳の南畝が江戸での一年間を記した『細推物理』という日記には、

狂歌堂真顔・吾友軒米人・山東京伝・曲亭馬琴来。馬蘭亭の息、及柳長、かほる、吉田やおますを携へ来りて、三線をひかしむ
（正月十九日）

狂文会兼題、紙鳶のことば也。五老子・曲亭馬琴・芍薬亭・為川氏等来
（閏正月十五日）

とあり、馬琴が鹿都部（狂歌堂）真顔や芍薬亭長根（一七六八〜一八四五）といった、当時の狂歌壇の中心人物が名を連ねている狂文会などに参加していることがわかる。また、時代は下るが文化三年（一八〇六）九月七日付の如登子（村上清太郎）宛書簡には、

十五夜

本庄中之郷大沢右京兆之別荘に近藤重蔵正斎寓居、庭の広き事二三町余、一町余の池あり、蓮葉生ひしげれり。池中に四阿あり、是又唐蛭の器物に蝦夷雜り。客は前方より觸置候御出席之面々。京伝 馬琴 焉馬 飯盛 馬

蘭亭 唐画人芙蓉阿人 柳橋歌妓お増 大橋歌妓 義太夫

ぶし手妻遣も有之、中村勘三郎座へ出候歌うたひ等来。

とあり、本庄にある大沢右京兆（基之）の別荘での宴にも、山東京伝・烏亭焉馬・宿屋飯盛といった人々とともに出席している。つまり、馬琴と南畝の関係には、狂歌・狂詩・狂文といった要素が少なからず影響していると思われる。

『自撰自集雜稿』「狂歌第四」に「寛政のはしめよりをりく、狂歌をよみたりし」とあるように、馬琴が狂歌に手を染めるようになったのは、寛政ごろと推測される。また、「寛政三四年のころはをさく狂歌に遊びし」（同）とも述べており、この時期の狂歌に対する馬琴の積極性が窺える。そして、真顔編の狂歌集には、馬琴自作の狂歌が入集している。いくつか挙げてみよう。例えば寛政五年（一七九三）刊の『狂歌上段集』⁽²⁵⁾には、

しらぬ火のつくしとる野にかりくれてまづなつかしき敷の
梅か香

夷講

夷講千金つ、に直を付んけふも小春の宵の一刻
をはじめ、十二首入集している。また、寛政七年刊の『四方の巴流』⁽²⁶⁾には、

干綱も屠蘇の袋の形に似て祝ふ銚子の裏の初春

立初る霞か関にはるのきぬとうしてみても紫は江戸

の二首が入集している。これらの狂歌を見る限り、南畝や真顔らと肩を並べるほどのレベルではないが、馬琴は狂歌サークルを通じて、彼らと交流関係を持つに至った。

以上から、馬琴・南畝・四君の交流関係が明らかになった。南畝を軸としている以上、狂歌が大きな要素であることに異論はないだろう。そして、この狂歌さらには狂歌壇が、『月水奇縁』成立をさぐるための手がかりとなる。

二

馬琴の上方旅行が地方狂歌壇を背景にしていると指摘したものに、濱田氏の「⁽²⁷⁾『狂歌壇の背景について』」（『文學』36-3、一九六八年三月）という論考がある。そのなかで濱田氏は、「京坂の人々を除いて」としたうえで、「馬琴の関心を持った過半の人々は、実に江戸狂壇の流れを汲む人々であったのである。極限すれば狂歌師歴訪なのである」と明言された。氏は京坂の人々を除いた理由として、江戸と上方の狂歌壇の関係が希薄であることを挙げておられるが、当時の東西狂歌壇はどのような関係にあったのだろうか。

寛政・享和期の上方狂歌壇は、⁽²⁷⁾西島孜哉氏が定義されているように、狂歌サークルという枠にとられない幅広い交流があった。そのような風通しの良い環境は、狂歌を専門としてない人たち（浮世絵師・歌舞伎役者など）をも受け入れることになった。例えば、『撰津名所図会』（寛政八〜十年（一七九六〜九八）刊）や『河内名所図会』（享和元年刊）といった名所図会の挿絵を多く手がけた⁽²⁸⁾丹羽桃溪（一七六〇〜一八二二）は、狂歌を鉄格子波丸（？）一八一二に学び、社中の狂歌絵本に挿絵を寄せることもあった。そして、社中に遊んで多くの粋人と出会うことで、その制作範囲を拡げていった。また、歌舞伎役者では初代嵐璃寛や初代沢村国太郎なども狂歌サークルに参加しており、当時の狂歌サークルが幅広い階層の人々によって成り立っていたことがわかる。

このような狂歌における異分野交流は、狂歌集以外の出版物において興味深い展開を見せる。八文舎自笑撰・流光斎如圭画の『役者百人一衆化粧鏡』⁽³⁰⁾（寛政十二年（一八〇〇）刊、以下『化粧鏡』）は、大坂における歌舞伎の手引書で、文字通り役者絵を百人一首に見立てている（実際は五十人分の役者絵のみ）。個々の役者絵には上方の狂歌師による狂歌が一首ずつ添えられており、その中には唐衣橘洲や鹿都部真顔といった江戸の著名



図1 唐衣橘洲



図2 鹿都部真顔

な狂歌師が名を連ねている（図1・2）。

周知のとおり、唐衣橘洲（一七四四～一八〇二）は、南畝・朱楽菅江（一七四〇～一八〇二）とともに狂歌三大家と称され、天明狂歌壇の中心人物であつた。また、鹿都部真顔は、「数寄屋連」を結成し、南畝の「四方」姓を継承するなど、化政期の狂歌壇を牽引する存在であり、先に述べたように、狂歌を通して馬琴と関係のあつた人物としても知られる。

一方、上方の狂歌師はどうか。例えば、栗呵亭木端（一七二〇～一七七三）は由縁斎貞柳（一六五四～一七三四）の門人で、『狂歌かゝみ山』（宝暦八年（一七五八）刊）や『狂歌生駒山』（宝暦十二年（一七六二）刊）といった狂歌集を撰し、後に「栗派」と呼ばれる一大狂歌サークルを組織する（図3）。また、仙果亭嘉栗（一七四七～一七九九）はその栗派の門人で、代表的撰集に『狂歌ならひの岡』（安永六年刊（一七七七））があり、その一方で、「紀上太郎」という名で江戸浄瑠璃も書き、平賀源内（一七二八～八〇）や烏亭焉馬（一七四三～一八二二）といった江戸の戯作者とも親交を結んでいた（図4）。さらに、『化粧鏡』に狂歌は収録されていないが、玉雲斎貞右（一七三四～九〇）門下の狂歌師蝙蝠軒魚丸（？～一八二二）も「佐藤太」の名で浄瑠璃を書き、特に馬琴の読本を浄瑠璃化することには



図4 仙果亭嘉栗



図3 栗呵亭木端

定評があった（『作者部類』）。さらには、読本作者として『越路の雪』（寛政十年刊）や『復讐竹の伏見』（文化十四年（一八一七）刊）などを執筆した。

『化粧鏡』は、八文舎自笑の手によるもので、狂歌サークルが関与していたかどうかはわからない。西島氏が、狂歌サークルを越えた連帯について、江戸風に対する反発によるものだと指摘しているように、少なくとも上方狂歌壇には江戸狂歌壇に対する対抗意識があった。しかし、自笑には東西の人気役者の似顔絵に著名な狂歌師による狂歌を配するという造本意識があり、少なくとも狂歌壇から少し離れたところでは、東西の垣根は低かったように思われる。

さて、『化粧鏡』の画工流光斎如圭（生没年未詳）は、寛政二年版『浪華郷友録』によると、姓は多賀、名は如圭。大坂北堀江四丁目あたりに居を構えていた。丹羽桃溪と同じく部関月（一七四六―一七九七）に絵を学び、安永年間から寛政年間（一七七二―一八〇二）にかけて活躍。上方において役者似顔絵を定着させ、「上方浮世絵の祖」と呼ばれる。数多くの一枚摺役者絵や天明四年（一七八四）刊の『旦生言語備』、寛政二年（一七九〇）刊の『絵本行潦』などの役者絵本に見られるように、流光斎は丸みを帯びた描線で人物を美化することなく写実

的に描いており、この筆法が上方における役者絵の方向を決定づけた。つまり、『化粧鏡』の挿絵を描いていた頃の流光斎は、役者絵師として円熟期を迎えていたことになる。

流光斎も狂歌サークルとの関わりは強い。現在確認できる中で、最も古い流光斎の浮世絵を収録しているのが、嘉栗の代表的撰集『狂歌ならひの岡』である。この『狂歌ならひの岡』には、全部で三十七葉の挿絵が収録されている。巻頭に円山応挙の絵がすえられ、蕪村の絵も二葉加わっている。さらに流光斎と同門の丹羽桃溪の挿絵も備わる。このような挿絵に重点を置く姿勢は、嘉栗の自序「画をましへてなをその余情けしきをたすけつ、」からも窺える。さらには、鉄格子波丸著の滑稽本『通者茶話太郎』（寛政八年刊）にも挿絵を寄せている。これは丹羽桃溪を介していると思われるが、波丸の狂歌サークルとも関係をもった。羽生紀子氏によると、現在確認できる流光斎の狂歌は、『除元狂歌集』（天明五年（一七八五）刊）における二首のみであるが、役者絵制作をめぐる事情がよくわかる。さらに羽生氏は、この狂歌集が丸派狂歌サークルの祖玉雲斎貞右の撰になることから、

丸派には歌舞伎役者の参加がみられ、さらには丸派狂歌師の中に役者の最良として知られる人物がいた。流光斎が後

に多色刷り役者絵を制作するようになる具体的契機の一つとして、丸派狂歌サークルが機能していたと考えられるのである。

と述べている。つまり、先ほどの丹羽桃溪と同様に、狂歌サークルへの参加が役者絵の制作に大きな影響を及ぼしていた。

三

以上のような狂歌サークルとの繋がりをもとに、流光斎の交流関係について、さらに踏み込んでみたい。流光斎が挿絵画家として関わった出版物を概観すると、特定の作者の作品に挿絵を寄せることがある。例えば、前章で述べた『化粧鏡』の作者八文舎自笑こと三代目八文字屋自笑（一七三八—一八一五）作の『役者用文章直指箱』（享和四年（一八〇四）刊）や『三都戲場草之種』（文化元年刊）といった演劇関係の作品が挙げられる。これは、役者評判記などの演劇関係書を多数出版した八文字屋と、数多くの役者似顔絵を描いてきた流光斎との『演劇』という共通点による合致であろう。ところが、流光斎が挿絵を寄せたもう一人の作者は八文字屋のような〈同業者〉ではなかった。その作者とは、何を隠そう馬琴の「友人」田宮仲宣であ

る。流光斎が挿絵を描いた田宮仲宣の作品は、享和三年（一八〇三）刊の『東臚子』と『劇場画史』、そして文化二年（一八〇五）刊の『随一小謡摩訶大成』の三作である。これらを具に見ていくと、興味深い人間関係が浮かび上がってくる。ここでは『東臚子』と『劇場画史』を例にとって考えてみる。

まずは『東臚子』から。本作は仲宣の号を書名とし、陰陽五行論や京坂地方などの風俗・伝説・言語などを書き記した漫録である。挿絵を担当したのは流光斎だけでなく、丹羽桃溪や仲宣の息嶺蔵も含まれる。また、本作には二つの序文が寄せられている。一人は桐江。現在のところどのような人物かは不明だが、序文中に「友人田宮宣」⁽³⁷⁾とあるので、親しい間柄にあったことは想像される。そしてもう一人が馬田昌調である。これも馬琴の「友人」である。彼の序文にも「友人田宮仲宣」という文言はもちろんのこと、「来乞序其首」とあり、巻頭の序文を依頼されていることから、仲宣からの信頼は大きかったと思われる。さらにもう一点注目すべきは版元である。『新板願出印形帳』に、

覚 作者 田宮由蔵

一 東臚子 全部五冊

右之書此度願出候所早速御願上被下忝奉存候

自然何国何方の差支被申出候ハ、いかやう共御差図

次第違背仕間敷候為後日依而如件

寛政十三年酉二月

秋田屋市兵衛

印

御行司中

とあるように、本作は秋田屋市兵衛が出願し、享和三年に同版元より出版された。秋田屋は、本稿冒頭で述べたように、四君に対して南畝から紹介を依頼された人物である。このように見ていくと、『東牖子』という作品から、〈田宮仲宣―馬田昌調―流光斎如圭―秋田屋市兵衛〉という人間関係が浮かび上がってくる。馬琴が上坂する前から如上の關係にあつたということから考えると、「友人」が馬琴に秋田屋を紹介することも頷ける。つぎに『劇場画史』。これは芝居に登場する数々の名所を描いた劇書で、享和三年に出版されたものは「山水之部」である。奥付によると、「人物之部」「禽獸之部」「艸花之部」が続刊される予定だったが、実際に出版されることはなかった。ところが、実は未刊に終わった「人物之部」に大きなヒントが隠されていた。それは、馬琴の『作者部類』に以下のような記述が見られるからである。

この年又大坂の書賣大野木市兵衛か需に応して劇場画史模寫の像賛狂詩三十六首を題す。こは京浪華の歌舞伎役者の肖

像也。そか中に江戸役者ハ市川白猿市川白猿只一人あるのみ。

つまり、秋田屋の依頼に応じて、流光斎の描いた役者絵に馬琴が賛として狂詩を添えたということである。この狂詩に関しては、『自撰自集雜稿』『狂詩狂賛類第三』にすべて記載されているが、その冒頭部分に、

享和二年。應^{シテ}於書肆大野木生之需^ニ。賛^ス于浪華ノ戲^{ヤシヤ}三十餘名ノ画像^ニ。名^ヲ曰^ク「劇場画史^ト」。不^レ知^ニ果^{セルヤ}否^ヤヲ。今以^ニ「稿本^ヲ」録^{スルコト}之如^シ左^ニ。

とある。ここでいう「稿本」とは、早稲田大学図書館蔵の『惜字雜箋』に収められている馬琴自筆草稿を指す。それは当該資料の扉に、「浪速盧橘庵撰／劇場画史」「大野木市兵衛開鐫」とあることからわかる。「人物之部」は、例えば【図5】にあるように、上部に狂詩を書き、下部に役者絵を配するパターンだったようである。ただ、残念ながら未刊に終わったため、流光斎が描いた役者絵の部分はシルエットのみである。また、奥付に「享和二年壬戌年／十一月二十七日稿」とあるので、馬琴は江戸に戻ってから狂詩を詠んだことになる。

以上から明らかになったことを整理してみよう。まず、流光斎は特定の作者に挿絵を寄せることがあった。その一人が田宮仲宣で、それぞれの作品は秋田屋が版元となっている。また、

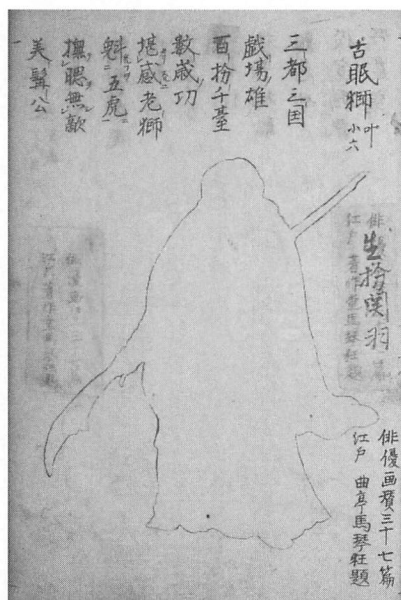


図5 馬琴自筆草稿『劇場画史』「生扮関羽」

その秋田屋が馬琴に対して、田宮仲宣の作品に狂詩を寄せるよう依頼している。さらに、『化粧鏡』などを出版した八文字屋は、馬琴の『往来人名簿』に「心齋橋筋^{うしろの筋}」本屋 八文字屋八左衛門殿」とあるように、秋田屋と同じ心齋橋筋に店を構えていた。したがって、先の南畝の紹介状に記されていた「心齋橋筋辺の書肆」というのは、八文字屋をも含んでいると思われる。つまり、田宮仲宣や秋田屋市兵衛、さらには八文字屋が仲立ちとなって流光斎と馬琴を結びつけたと考えられる。

四

つぎに、『月水奇縁』の版元河内屋太助について考えてみたい。河内屋は文金堂、森本氏。心齋橋筋唐物町に店を構えていた。享和二年より写本で伝わる歌舞伎台本を上方浮世絵師の挿絵入りで版行開始（絵入根本）。文化八年には八文字屋より評判記の版行権を引き継ぎ、天保十三年（一八四二）まで継続的に版行し、芝居本も手がけて演劇書出版で上方随一となる。

河内屋の活動として近年注目されているのが、絵入根本の出版である。絵入根本は、台帳と同様に、「せりふ」「卜書」「舞台書」が整っているが、多少の省略や場割の変更などもあり、配役も実際のものではなく物故者が入っていたりと、出版当時の理想を表したものになっている。挿絵は役者似顔絵で舞台面の図が多く、冒頭には極彩色のものが数葉入り、各冊に挿絵が入るなど、読本の様式に倣っている。元禄期より歌舞伎の絵入り筋書き本が刊行されていたが、筋書きだけでは満足を得られず、より詳細な台帳を読みたいという読者の要求の高まりがあり、まず貸本屋が台帳の写本でその求めに応じていたのが、量的に応じきれなくなった時、出版という形に変わっていったのではないかとされている。絵入根本の第一作にあたるのは、『絵本

戯場葉^{しばいしわ}』（享和二年刊）で、その挿絵を手がけたのは、松好斎半兵衛（生没年未詳）であった。松好斎は、流光斎の弟子で、寛政から文化年間にかけて活動したが、その中心は版本で、特に絵入根本では主要絵師として活躍した。

彼が挿絵を寄せた絵入根本の一つに、『俳優浜真砂^{やくし}』がある。

これは安永七年（一七七八）四月に角の芝居で初演された『山門五三桐』を根本に仕立てたものであるが、序文を寄せたのは馬琴であった。その序文には、まず「浪速の三津の画に名たる松好斎のわざくれにして」と述べ、松好斎が挿絵を担当したことを明示している。さらに、「はしが、りの端書せよと。百四十里の上の句から。吾妻の果の下の句まで。しば／＼需にこし折は。いやといはさぬ大難題」とあるのは、江戸から遠く離れた大坂の河内屋より序文を依頼されたということを意味する。そして「享和三階」「きさらぎ下旬」とあることから、序文を書いたのは享和三年の二月下旬、すなわち馬琴が江戸に戻ってから半年後のことである。注目すべきは、序文の年記が享和三年二月ということ、つまり『月水奇縁^⑩』の序文（「…享和三年歳在癸亥春二月上浣曲亭蟬史書於著作堂南牕紅梅深處」）とほぼ同時期だということである。

ここで思いだしてほしいのが、『作者部類』の「大坂の書買河

内屋太助に前約あれば」という記述である。「前約」とあるので、馬琴が在坂中に河内屋と出版の契約を交わしたということである。残念ながら、河内屋に関する記述は『羈旅漫録』に見られないが、南畝の書簡に「心斎橋辺之書肆等へ御引付奉頼上候」とあるので、同じ心斎橋筋に店を構える秋田屋・八文字屋とともに「友人」に紹介してもらった可能性が高い。それを裏付けるのが、『俳優浜真砂』の口絵である。

『俳優浜真砂』の口絵は全部で八葉あり、松好斎が描いた役者絵に狂歌が一首ずつ添えられている。これらの狂歌は、雪月庵花咲成を中心とした狂歌サークル「花咲成連」のメンバー（始松成長・此花咲芳など）が中心である。松好斎の役者絵本『まさかゞみ』（文化三年刊）にも花咲成連の狂歌が添えられていることから、松好斎と花咲成連は何らかの繋がりがあったと思われるが、その中に、蘭生方役の瀬川路考が描かれた一葉があり、そこに寄せられた狂歌の詠者として、「蕪坊」の名が見られる（図6）。蕪坊は先述のとおり、四君の一人であるので、河内屋に馬琴のことを口添えていた可能性がある。蕪坊は紫笛門の狂歌サークルに所属していたので、花咲成連とどのような関係にあったかはわからないが、当時の状況を考えれば、複数の狂歌サークルが連帯することもあり得ることだと考えられる。



図6 『俳優真砂』口絵

最後に、河内屋と流光斎の関係を明らかにしておかねばならない。そこで、鍵となってくるのが八文字屋である。先に述べたように、河内屋は八文字屋から役者評判記の版行権を引き継いだので、両書肆はそれ以前から関係をもっていたことになる。例えば、寛政十二年（一八〇〇）刊の『戯場楽屋図会』では相版元になっているので、少なくとも十年以上前からの付き合いである。そして、八文字屋の出版物には流光斎が挿絵を描くことが多かったことを合わせて考えると、河内屋と流光斎は八文

字屋を介して関係を持っていたのではないか。ちなみに、馬琴作の『戲子名所図会』（寛政十二年刊）は江戸の鶴屋喜右衛門を版元として出版しているが、大坂の販売元は八文字屋であった。ただ、『月水奇縁』の挿絵に関して、気になる点がある。本稿冒頭で、『作者部類』の中の『月水奇縁』に関する記事を取り上げたが、そこには割書で「画像浪華の画工に画かしむ画工の名を知らず」とある。この不可解な記述を不審に思った殿村篠斎は、次のように問いただしている。

月水奇縁の画工ハ浪華の人流光斎名ハ如圭とかいひし浮世画工にて、当時俳優の肖像を画くに名ありしもの也。絵本信長記の拾遺の後編のさし画も此人の筆なりし歟とおほゆ。その画名江戸まで聞えたるほどのものならねハ、わざとほめかして知らすといハれしにや。浪華にてハ当時有名の浮世画師なりき。この人の彩色画をも見しに、元ハ月岡なとを学ひしにやとおもほゆる也。

これに対し馬琴は、「流光斎ハわつかに一二の巻を画きしのミにて病着ありとて得果さ、りしかハ、板元河太已ことを得すと戻し、別人に画かしたり。こゝをもてその書に画工の名をあらハさ、りき。見るへし三の巻より末ハその画いたくおとれり」と述べ、実際に流光斎が描いたのは巻一・二だけで、あとは別人

に描かせたことを告白している。その理由は「病着」という。第一章で述べたように、馬琴が江戸に戻ったのは八月で、序文を書いたのが翌年の二月ということなので、『月水奇縁』の草稿は五ヶ月ほどで成った。ところが、実際の刊行は文化二年春だったことを考えると、この間に紆余曲折があったものと思われる。徳田氏は『割印帳』⁽⁴⁾「文化元子年四月廿一日不時」の

文化元子年四月 板元売出し

月水奇縁 曲亭馬琴著 全五冊 蔦屋重三郎

という記事から、当初は蔦重を版元として出版する予定だったが、河内屋との前約もあり、「蔦重と河太の間には版元権をめぐって何らかのいざこざがあった」と推測している。しかし、筆者は流光斎の「病着」も原因の一つだったのではないかと考えている。「已」ことを得すとり戻し」とあるので、出版までこぎつけていたものを、いったん河内屋の許に戻して、別の絵師に描かせた上で、再度刷り直したのであろう。このような複合的要因によって出版が大幅に遅れたと思われる。

おわりに

以上、『月水奇縁』の成立に関して、『羈旅漫録』を手がかり

にして考察を進めてきた。馬琴は大田南畝の紹介のもと、四君と呼ばれる人々から大坂を案内してもらった。わずか十日間の滞在ではあったが、田宮仲宣を介して秋田屋市兵衛という版元を紹介してもらい、その縁で流光斎如圭と知り合えた。さらに、その流光斎を介して八文字屋と相版元の関係にあった河内屋太助と『月水奇縁』の出版契約を交わすことができた。このような人的交流が、本作の成立にとって欠かせない要素であっただろう。特に河内屋は『月水奇縁』を契機として、『新纂解脫物語』（文化四年（一八〇七）刊）や『松染情史秋七草』（同六年（一八〇九）刊）といった読本の版元として、馬琴と良好な関係を築いていくことになる。前半で引用した南畝の紹介状によると、南畝の馬琴に対する評価は「近來京伝二つぎての作者」とあるものの、その評価の対象は「絵草紙」や「和文」であった。ところが、『月水奇縁』を世に出すことによって、その評価軸は草双紙から読本へと変わった。そして、半紙本読本の執筆を重ねることに、その地位は確固たるものとなっていく。馬琴の上方旅行は、まさに転機であった。

〔注〕

（1） 木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』（八木書店、

- 一九八八年五月)
- (2) 暉峻康隆『江戸文学辞典』三四六～四七頁(富山房一九四〇年四月)
- (3) 大高洋司「『月水奇縁』の成立」(『近世文芸』25・26、一九七六年八月)
- (4) 同「『優曇華物語』と『月水奇縁』——江戸読本形成期における京伝、馬琴——」(『読本研究』1、一九八七年四月)
- (5) 徳田武「文化初年の馬琴読本と中国白話小説——『月水奇縁』と『稚枝鳩』——」(『文学』46・6、一九七八年六月)
- (6) 野口隆「『月水奇縁』の漢詩文的修辭」(『国語国文』72・3、二〇〇三年三月)
- (7) 注3大高氏論考。
- (8) 濱田啓介「寛政享和期の曲亭馬琴に関する諸問題」(『国語と国文学』55・11、一九七八年十一月)
- (9) 『日本随筆大成』第一期第一卷(吉川弘文館、一九七五年三月)
- (10) 『日本随筆大成』第一期第十卷(吉川弘文館、一九七五年九月)
- (11) 柴田光彦「翻刻 滝沢家訪問往来人名簿 上」(『近世文芸研究と評論』33号、一九八七年十一月)
- (12) 『馬琴書翰集成』第六卷(八木書店、二〇〇三年十二月)
- (13) 支配勘定は、江戸幕府の職名のひとつ。勘定奉行の下僚で、勘定組頭の指揮のもと、勘定所所管の事務を処理する役割をもつ。寛政八年(一七九六)に支配勘定出役が二十名設置され、天保九年(一八三八)には計六十五名と定められた。『江戸幕府大事典』(吉川弘文館、二〇〇九年十二月)など。
- (14) 『大田南畝全集』第十九卷(岩波書店、一九八九年三月)
- (15) 『大田南畝全集』第十卷(岩波書店、一九八六年十二月)
- (16) 『大田南畝全集』第八卷(岩波書店、一九八六年四月)
- (17) 注14前掲書。
- (18) 注8濱田氏論考。
- (19) 例えば、『蘆の若葉』卷之三「八月十三日」条によると、南畝は昌調とともに酒家を訪れて、左のような七絶を詠んだ。
- いつしか光はなやかにもり来りて、床のかたにさしいるにぞ、香炉峰月撥^レ簾看^レなどとよみはひぬ。かはらけとりあへず、馬田氏と、もに聯句、
- 良宵期近雨初収 天洋
- 切々陰虫北野秋 蜀山
- 更有^二残雲猶易^レ蔽 天洋
- 明年誰繼此風流 蜀山

折からの虫の声ひゞきをぞふ。

- (20) 馬琴と昌調はお互いの作品に序文を贈ることがあった。
例えば、馬琴の『括頭巾縮緬紙衣』（文化四年（一八〇七）刊）には昌調が、昌調の『朧月夜物語』には馬琴が序文を寄せた。
- (21) 文政八年（一八二五）刊『仮名世説』（『大田南畝全集』第十卷、岩波書店、一九八六年十二月）参照。
- (22) 注16前掲書。
- (23) 注14前掲書。
- (24) 未刊文藝資料第一期2『曲亭馬琴家集』上（古典文庫、一九五一年六月）
- (25) 『江戸狂歌本選集』第四卷（東京堂出版、一九九九年六月）
- (26) 注25前掲書。
- (27) 西島孜哉『近世上方狂歌の研究』（和泉書院、一九九〇年八月）
- (28) 高杉志緒「上方狂歌絵本に関する一考察——鉄格子波丸と丹羽桃溪をめぐる——」（『混沌』31、二〇〇七年十月）
- (29) 羽生紀子「嵐璃寛と丸派狂歌——月並の雅筵への参加——」（『鳴尾説林』11、二〇〇三年十二月）
- (30) 関西大学図書館蔵本を底本とする。
- (31) 大屋多詠子「読本作者佐藤魚丸」（『国語と国文学』84、12、二〇〇七年十二月）
- (32) 注27西島氏論考。
- (33) 『近世上方狂歌叢書』4（和泉書院、一九八六年二月）
- (34) 羽生紀子「流光斎・春朝斎・桃溪と狂歌——丸派狂歌サークルへの参加——」（『武庫川国文』63、二〇〇四年三月）
- (35) 『随一小謡摩訶大成』は、『新板願出印形帳』（『大坂木屋仲間記録』14、大阪府立中之島図書館、一九八九年）によると、『当流随一小うたひ』という題で寛政十三年二月に大野木市兵衛が開板を願い出ており、都立中央図書館本奥付に「撰都 大野木市兵衛」とあるので、版元は大野木市兵衛であると考えられる。ちなみに、関西大学図書館本奥付を見ると、「撰都 赤松九兵衛」とあるが、そこには入木の跡が見えるので、後刷だと思われる。
- (36) 丹羽桃溪は、田宮仲宣作の滑稽本『つべこべ草』（天明六年刊）に挿絵を寄せたことがあるので、同じ部関月門の流光斎に仲宣を紹介した可能性がある。
- (37) 『日本随筆大成』第一期 第十九卷（吉川弘文館、一九七六年）
- (38) 注35前掲書。

(39) 関西大学図書館蔵の文化二年版を底本とした。

(40) 『馬琴中編読本集成』第一卷（汲古書院、一九九五年四月）

(41) 『享保以後江戸出版書目』（臨川書店、一九九三年十二月）

(42) 注40前掲書「解題」。

〔付記〕

本稿は、関西大学国文学会（平成二十一年七月十八日、於関西大学）での口頭発表に基づくものです。席上では、水田紀久先生・北川博子先生より貴重な御意見を賜りました。また、本稿を成すにあたり、早稲田大学図書館・関西大学図書館には、資料の掲載を許可していただきました。ここに記して、感謝の意を表します。

（なかお かずのり／本学大学院生）